

山口県下

響灘・日本海域の可能表現法

—九州方言との同質性—

岡野信子

はじめに

いま、「山口県下、響灘・日本海域」と呼ぶのは、具体的には、下関市・豊浦郡・大津郡・長門市・萩市、および阿武郡の、日本海がわの地域である。この地域、ことにその南部域の下関市と豊浦郡の方言は、しばしば九州方言との近さを見せる。その状況については、「関門海峡圏域の方言状況」（岡野一九八八）や「海がことはに働くとき」（岡野一九八三）でも述べたが、この稿では可能表現法の上にその状況を見、考えてみたい。

この地域の可能表現法は、その形式からは、助動詞を添えて言うもの、副詞「ヨ」によつて可能を言うもの、可能の意を持つ動詞によるものに分類することができる。助動詞を添えて可能を言うものから順次とりあげて、その表わす可能の意味を考察し、使用状況、使用地域を見ていく。

(1) この稿にあげた文例を得た地点の正式名称は以下のとおりである。なお、この番号は、文例の下に記した地点名のアイウエオ順に従っている。「エル・ヨル分布図」上には、文例を得た地点を

山口県下、響灘・日本海域の可能表現法 —九州方言との同質性—

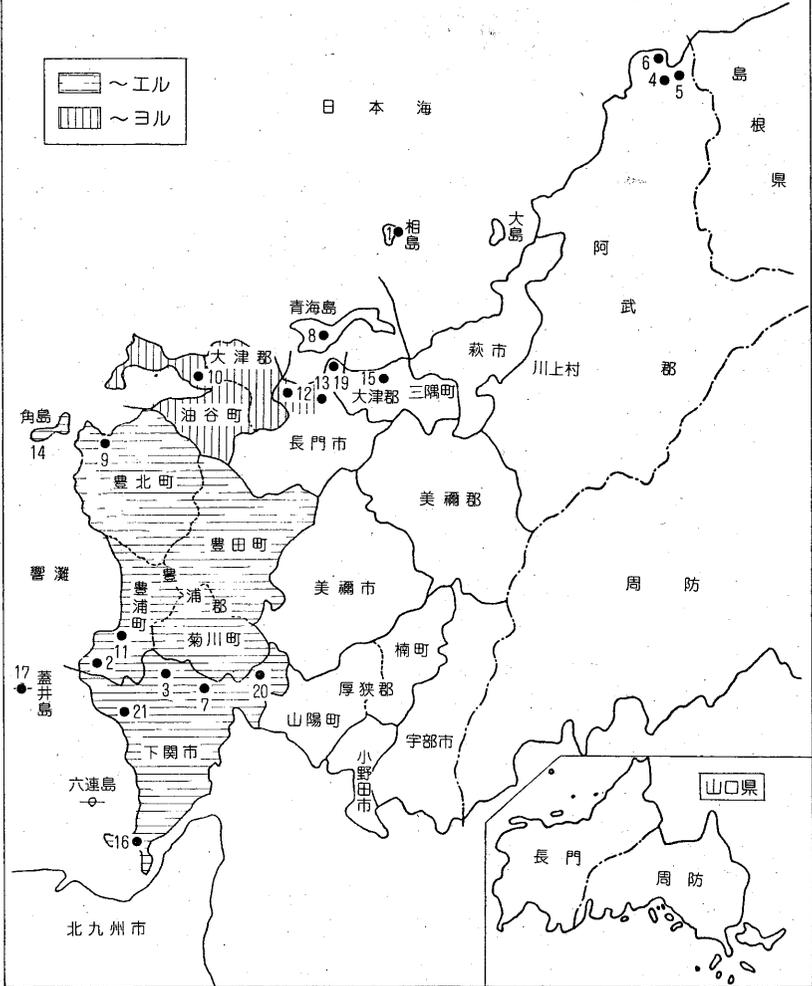
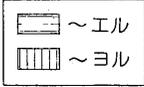
この番号で示している。

- 1 萩市相島 アインマ
- 2 豊浦郡豊浦町厚母 アツモ
- 3 下関市内日 ウツヒ
- 4 阿武郡田万川町江崎 エツ
- 5 阿武郡田万川町江崎 エビス
- 6 阿武郡田万川町江崎尾浦 オハラ
- 7 下関市大字阿内 オウチ
- 8 長門市大泊 オイトマリ
- 9 豊浦郡豊北町大字阿川大曲 アガワ オイマガリ
- 10 大津郡油谷町掛淵 アヤチヨウカケフチ
- 11 豊浦郡豊浦町川棚 アワシ
- 12 長門市境川 サカイガワ
- 13 長門市正明市 シヨウメイシ
- 14 豊浦郡豊北町角島 ツノシマ
- 15 大津郡三隅町豊原 ミスマチノトハラ
- 16 下関市彦島 ヒコシマ
- 17 下関市蓋井島 オウシマ
- 18 萩市見島 ミシマ
- 19 長門市湊 ミナト
- 20 下関市大字吉田 ヨシダ
- 21 下関市大字吉見下 ヨシミシメ

(2) 文例の右傍線はアクセントの高音部である。

(3) 文例の下に記した「高男」、「青女」などは年層と性別の略記で、「高」は高年者、「青」は青年である。なお、「調」は調査者の略記である。

エル・ヨル分布域図



一 助動詞を添えて言う可能表現

当域で可能表現に働く助動詞は「レル」、「ラレル」類、「エル」、「ヨル」、「キル」である。

1 動詞未然形+レル・ラレル類

。オサカナモ イキタ イゴクノ タベラレルケ ネー。〈江津高女↓調〉

お魚も、生きて動いているのを食べることができからね（浦が近いから）。

。コレデ カタレルロー カ。〈大曲 高男↓調〉

こんな状態で勝つことができるだろうか。

。ナンボ シッタ ヒトデモ オシエラレン。〈阿内 中女↓中女〉

女

どんなによく知っている人でもこれは教えることはできない。

「タベラレル」、「カタレル」、「オシエラレン」のように、動詞の未然形に「レル」、「ラレル」、またその打消形を添えた話部は、その行動・行為が可能、あるいは不可能であることを表現している。

いったいに「可能」の意味内容はかなり多様であるが、今とりあげたものはいわゆる状況可能である。ここには、外部状況が原因、理由となつて事の可能、あるいは不可能がもたらされたとする話者の判断がある。外因可能とも言えようか。

「レル」、「ラレル」を添えた可能形式はまた、つぎのような表現内容も担っている。

山口県下、響灘・日本海域の可能表現法 — 九州方言との同質性 —

。イヨイヨ アサガ オキラレン デー。〈豊原 高女↓高女〉

どうにも早起きができないのだよ。

話者は「オキラレン」は「ヨー オキン」と同じだと言う。つまり早起きができないのは低血圧のためなどと理由を言おうとするのではなくて、自身にその気力・体力がなくて事がかなわない事実を言っている。これは一般に能力可能と呼ばれるが、能力可能とされるものの内部には、「そんなことは恥ずかしくて言ワレン」や、「あの時の恐ろしかったことは忘レラレン」などもある。このように、能力にせよ、心情にせよ、可能・不可能の原因・理由を行為者その人に認めている。すなわち内因可能であるが、その因を言いたるのではなくて、そこに実現している状態を言うことが主となっている。

外因可能、内因可能という用語は今後さらに考えてみたい。本稿ではひとまず従来の状況可能、能力可能という用語を借りる。

このように、「レル」、「ラレル」は当域の全域、全年層において、状況可能にも能力可能にも用いられている。ただし能力可能のばあいは、以下に記す「エル」、「ヨル」、「キル」を添えた表現形式、また副詞「ヨー」で可能を言う形式によることのほうが多い。

ところで大津郡三隅町や阿武郡田万川町の高年者は、次のように、「レル」、「ラレル」を「エル」、「ラエル」のように発音しがちであった。

。スルメニ シツリヤー ナン デー。カナリ カネガ トラエルデー。〈戎 高男↓妻〉

するめにしたら何だよ。かなりもうかるよ。

・ナンボ ハヨ一テモ オキラエル。〈三隅 高女↓高女〉
どんなに早くても起きることが出来る。

ただし、不可能のばあいには音変化はおこらず、「くレン」、「く
ラレン」である。もつとも下関市蓋井島の高年者からは、昭和五十
年前後に、次のように「ラエン」も聞いている。

・アーユー コトバー キーチャラエン。

あんなことばは聞いていられない、聞くに堪えない。

また、「レル」・「ラレル」を古風な二段活用形式で言うこと
も、高年者からは全域で聞く。

・ヒチンゴロニヤー デラール。〈川棚 高男↓高男〉

七時ごろには出ることが出来る。

・コラルル マサエ アリヤー ナー。〈角島 高男↓調査者〉

来ることのできるひまさえあればねえ。

・ハラノ ヘッタ トキヤー カカエラリヤ スマーノ。〈大
曲 高男↓高男〉

空腹の時は（こんな重い物は）抱えることはできないね。

「出ラール」、「抱エラールリヤ」などの二段活用は若い人々には
受けつがれていない。

2 動詞連用形ナエル

・オドリエル カナ。↑。イヤ、エン チャ。〈吉見下 高女↑高
女〉

あなたは踊れるかね。↑いや、踊れないよ。

・テゴ一 シエンケ。〈下関市吉田 高女↓調〉

手伝うことができないから（体調が悪くて）。

・コト一カイ イキエンソデス。〈角島 高女↓調〉

（親の反対を押し切つてまで）高等科に行くことはできないの
です。

これらの文中の「オドリエル」は伎倆によって、「シエン」は体
力によって、事が可能、あるいは不可能になったという判断を背後
に持っている。「イキエン」は、このばあいは自己の心情が不可能
の因となっている。

このように可能の助動詞として働いている「エル」は、本来は下
一段活用の動詞「得る」である。最初の文例の「エン チャ」のよ
うに、相手の「くエル カ」を受けて動詞的に用いられることもま
れにはある。

「くエル」はまた、「くはエル」のように言い、この形式のもの
のほうが多く聞かれる。

・イツショーグライ タビヤー エル イナ。〈角島 高男↓調〉

酒の一升ぐらい飲むことができるよ。

・アネ一ナソガ フタリ オッチャー ケンカノ チューサイシ
ヤー エン。〈川棚 高女↓高女〉

あんな者が二人居てはけんかの仲裁はとんでもできない。

一般に助詞「は」が一語部を割つて二語部仕立てにする時は強調
の心意が働いているが、当域の「くはエル」、「くはエン」には、
強調の心意の認められるものもあり、さして強調心意の感じられな
いものもある。

当域の「エル」は、長崎県・佐賀県の「ユル」（得る）と一連のもの
であろう。ところが両域の間の福岡県域では「エル」も「ユル」

も聞けない。ここは新しい「キル」を好んで、早く「得る」を捨てたようである。そのため、九州と中国の「得る」地域は分断された形となったが、福岡県域にも、かつて「エン」を使用していた痕跡は認められる。

福岡藩儒井上学圃の『小学方言講義』は福岡の方言で書かれているが、春日政治博士はこの書に可能助動詞「エ」の見えることを明らかにされた(春日 一九三三)。博士がとりあげておられる文例は、「公伯寮イカニハタラキマストモ天命ヲドウイタシエ、マセフニ」や、「不粒食ハ齒ニサハルツブノアルモノヲタベエ、マッセヌギデ御座リマツスル」などである。博士の推定では、『小学方言講義』は天保八年以前に書かれている。そのころには、福岡地方でも可能表現に「エル」を言っていたのであろう。

また明治三十二年刊の『福岡方言集』(福岡県教育会本部編)には、「為シ能ハズ」の方言として、「志ゑん」(八女郡南部)が見えている。

北九州市域の一般状況としては、「ゝエル」、「ゝエン」の報告されたものを見ない。ただ筆者は小倉南区曾根で、昭和三十年に七十五歳の女性から、「アユミエンデ カタニ カカツテ モドツテ キタ」(歩くことができなくて人の肩に寄りかかって戻って来た)と聞いている。

この孤例で、北九州市域に昭和期にも「エン」があったと言うことは危険であろう。が、明治十年代に生まれた人の意識の底に沈んでいたことばが、ある時、ふと口について出るということはあり得たかもしれない。

山口県下、響灘・日本海域の可能表現法 — 九州方言との同質性 —

ともあれ、下関市と豊浦郡に分布する、可能表現の「エル」は九州の「ユル」の分布に続くものである。これを、九州から伝播したと見るか、本来、九州にも当域にも分布していたと見るか、おそろく後者であろう。「ゝ得」は文献上に中央語として早く見えている。「ロドリゲス日本大文典」(土井 一九五五)に *Xiyenu* (し得ぬ) が記載され、『邦訳日葡辞書』(土井ほか 一九八〇)に *yomiyenu*, &c. (読み得ぬ、など) があがっていることは、室町時代には中央語の日常語であったことを示しているようか。それは国土の周辺域にまで広がり、そして周辺域に残ったかと察せられる。

また「表現法の全国的調査研究」(国研 一九七九)の38図はその推察を立証してくれる。すなわち「キーエン」(着得ぬ)類が、長崎県・佐賀県のほかに、高知県と静岡県の海岸域、そして長野県内に見えている。また「キレエナイ」類が、島根県の出雲と静岡県の海岸、そして長野県に分布している。この地図は準備調査の結果の地図化であって、調査地点がふえた本調査では「ゝエン」の分布地点はさらに多くなるであろう。大橋勝男氏は新潟県北魚沼郡広神村で聞かれた「出リネー」、「行ギネー」を、あるいはこの系統のものかと言われる(大橋 一九八八)。このように中部地方以西に広がっている「ゝエル」、「ゝエン」は、当然、響灘沿岸域にも分布していたと考えられる。

当域の「ゝエル」、「ゝエン」表現は昭和五十年ごろまでは、郡部や島では子供たちからも聞けるほどに優勢であった。その状況は『山口福岡両県接境地域言語地図集』(梅光 一九七六)の「13」可能B」(少年層図)にも見えている。そのころ、蓋井島では、小学

一年生の男児も日常に「ボクヤッタラ カキエンガ」(僕だったら書けないよ)と言っていた。しかし昭和六十年代の今日は、郡部でも、大学生以下の若年層からはまず聞けない。「エル」に代わって優勢になっているのは、後に述べる「キル」である。

3 動詞連用形十ヨル

いわゆる能力可能に、「イキヨル」(行くことができる)のよう
に言うのは、「ヨエル」地域に隣接する、大津郡油谷町と日置町、
そして長門市の海岸域である。またこの地域と遠く隔った孤島の萩
市見島でも、この「連用形十ヨル」を言っている。

。ワシデモ ヤリヨル イヤ。〈掛淵 高男↓高男〉

わしでも(それぐらいのことなら)できるよ。

。ワタシデモ サケノ イッパイグライ ノミヨル イナ。〈境川

高男〉

私でも酒の一杯ぐらいは飲めるよ。

。ソレグライノ コトワ ノミヨル。〈見島 中男〉

それくらいは飲むことができる。

このように用いられている「ヨル」は「得る」であろう。「ウル」
の語頭に半母音を置けば、長崎・佐賀県下でおこなわれているよう
に「ユル」となる。これが「ヨル」であるところには、「ヨーカタ」
(夕方)、「シヨモ」(所務―収穫)、「クチビロ」(唇)と同類
の音変化が見られる。

さて「ヨル」が「うる」から転じたものであれば、不可能形式は
「ノエン」のはずであるが、「ノエン」をこの地域で聞き得ている
のは次の一例だけである。

。サルワ バンニャー デヤ エン ヨ。〈境川 高男↓調査者〉
猿は晩には出て来られないよ(目が見えないんだから)。

この男性は、「酒の一杯ぐらいノミヨル」と言った人である。

この一例の「ノエン」以外は、不可能形式は「ヨヨラン」であ
る。

。コイダケノ ゴチソ―ワ クイヨラン。〈見島 高男―中男〉

こんなにくさんの御馳走は食べられない。

。ワシヤ― ヤリヨラン。〈掛淵 高男〉

私はすることができない。

このように不可能形式に「ヨヨラン」が出るのは、「ヨル」のラ
行五段化によるものである。「見ラン」、「出ラン」を言う地域で
あるから、「ヨル」の五段化もさして特異ではない。この地域はま
た進行形式に、「オル」(居る)を添えた「見ヨル」、「見ヨラン」
を言う地域でもあるから、これへの類推が不可能表現に「ヨラン」
を生んだのかもしれない。

しかし進行も可能もともに「ノヨル」であつては弁別に不便な
ずであるが、これはアクセントによって識別されているようであ
る。すなわち、「ヨル」を添えた可能形式では「イキヨル」(行き
得る)、「ユイヨル」(言い得る)、「ノミヨル」(飲み得る)。
「ミヨル」(見得る)、「タベヨル」(食べ得る)である。一方、
「オル」(居る)を添えた進行形式では、「イキヨル」、「イーヨ
ル」、「ノミヨル」、「ミヨル」、「タベヨル」となる。もつとも
見島のばあいはいったいにアクセントが特異で、可能表現も進行表
現も文アクセントの型に支配されている。アクセントで両表現を区

別することはないようである。

なお、長門市域では、「〜エン」を聞いたが、その他の地点では「〜エン」も「〜ヨラン」も聞けない。不可能表現は後述する「ヨ〜ン」である。伝播してきた新形式は、不可能表現にまず受容される状況がここに見られる。

中学生はこの「ヨル」、「〜ヨラン」を言うことが少ないが、家庭や居住地区といった言語環境による使用差も見られる。また数名の中学生は、「ヨミヨル」（読み得る）は言わないが、「キヨル」（着得る）、「キヨラン」（着得ぬ）は言うと言えた。ただし言うのは言い切りの時だけで、「キヨランカラ ……」などとは言わないという。言いやすいものだけを言うという自覚はおそらく正しいであろう。

4 動詞連用形+キル

。ソノクライン コトナラ アノ コタテ シキル イナ。〈厚母高女↓高女〉

それくらいの子だつてすることができるよね。

。ノミキランデ ハッテ イタバリー ナル ホイナ。〈蓋井島高女↓調〉

（赤ん坊が）乳を飲む力がなくてお乳が張って、まるで板のようになるのよ。

。ムツカシーケ ヤリキラン。〈阿内 中男〉

むずかしいからすることができない。

。ソナナ ハズカシー コト シキラン イネ。〈彦島 少女↓少女〉

山口県下、響灘・日本海域の可能表現法 — 九州方言との同質性 —

そんなはずかしいことは、私はできないわ。

。アノ トキノ コター ワスレキラン ホ。〈小串 中女↓中女〉
あの時のことはどうしても忘れることができないの。

「〜キル」、「〜キラン」はこのように用いられていて、これに託される表現意図も表現の心情も、「〜エル」と「〜エン」のばあいと変わらない。ただし、「〜エル」と「〜エン」では、日常会話の中の出現頻度数は、「〜エン」の方がいくらか多いにしても大差はなかった。一方、「〜キル」と「〜キラン」とでは、比較にならないほどに「〜キラン」が多い。

この「〜キル」、「〜キラン」は対岸の九州北部域から山口県下の長門域に伝播したのであるが、新来の表現法はまず不可能表現の方に受容されたのである。先には、長門市域では「〜ヨル」の可能表現に対して不可能表現は「ヨ〜ン」である事例もあった。

「キル」、「キラン」のおもな使用域は、下関市と豊浦郡である。もっとも豊浦郡も北部になるほど、「〜キル」、「〜キラン」は劣勢になる。なお、豊浦郡に続く大津郡油谷町でも、中学生からは、「〜キラン」を聞くこともあった。さらに北部の長門市域でも、後に述べるように、「ヨ〜ンシキラン」の形で、「キラン」を聞いている。一方、豊浦郡も内陸部の豊田町では、「〜キラン」をまれに聞くこともあるが、人々にはこれを言っているという自覚はない。また下関市域でも瀬戸内海がわの山手の地である阿内の人々の中には、「ヤラー エン」は昔からのことは、「ヤリキラン」は今のことばであり、よそから入ったことばであると教示する人もいた。下関市や豊浦郡の海岸域の人々には、これを「よそこことば」と

する意識は今はないようである。

「くキル」、おもには「くキラン」であるが、その使用状況を見ると、男性よりは女性のほうがこれを早く口にしている。ただし五十代、六十代の女性では個人差がかなりある。

また若年層は沿岸域では男女の別なく「くキラン」一色となっている。「くキル」、「くキラン」表現法は今後いちだんと優勢になるであろう。

ところで見島は北方に位置しながら、先に見たように「くキル」を言う点でも特異であったが、この「キラン」をも受け入れ、かつ変容させている。見島よりはいくらか沿岸域に近い相島、大島にもその状況は見られた。

。ホイテ ナマリワ デキキラナイ。カイタホワ。〈見島 青男↓調〉

そして訛りは十分には出得ない。書いたものは（やはり話さないためだ）。

この文の「デキキラナイ」は「でききらぬわい」であるから、「キラン」はその形を保っているのであるが、「出キラン」、あるいは「出リキラン」とあるべきものが「出キキラン」となっている。

。ソリヤー ハナシニ ハナシキラレン ツライ コトガ アッタ
ヨ。〈見島 中女↓調〉

それはもう言うに言われないつらいことがあったよ。

「話シキラレン」の「キラレン」は、「キラン」を下一段に活用させている。これは萩市の沿岸に近い大島でも、「カキキラレン」

（書くことができない）などと聞いている。

。キレンダケ アル ヨ。〈見島 高女↓調〉

着物は（一生かかっても）着てしまえないほどたくさんあるよ。

。マー ソレジャケド ノ、ナンデス ワ、イキキレマセンカラ。
〈相島 高女↓調〉

（病院の先生が、忘れたところに通院してきても効果がないと言われる）、まあそうだけどもね、なんですよ、船での通院は毎日 ほととも行くことができませんから。

九州からはかなり遠い見島、相島、大島が、九州の「キル」をもっぱら不可能表現の面で受入れ、しかもこのように変容させているのは、伝播の一つの実態を見せていて興味深い。九州からの距離がこれらの島々とはほぼ等距離であっても、本土域の萩市では「くキラン」を受け入れてはいないようである。

二 副詞「ヨ」による可能表現

副詞「ヨ」は文献上の「え」であろう。周防域には「エ」と言う所も多い。文献上では、平安時代以降は副詞「え」（得）を持つ文の結びは否定に限定されるようだという（渋谷 一九八六）。当域の「ヨ」も、自然に聞き得た文の中では、次のように多くは打消しの結びと呼応して能力不可能を表現している。

。アタシラー アネーナ コター ヨー センケー ネ。〈江津 高女↓調〉

私どもはあんなことはとでもできないからね。

・アノ ヒター ヘーキデ ユーテジャ ナー。ワタシダチャー
ヨー イワン デー。〈豊原 高女↓高女〉

あの人は平気で言われるねえ。私たちはそんな気の毒なことを
口にすることはとてもできないよ。

・アメカゼガ フイタ トキニヤ ウチーワ ヨー ハイラント
キズカイヨリマシタ。〈湊 高女↓調〉

(夫が漁に出ていて) 雨風になった時には、家の中に入る気には
なれなくて、外に立って寒じていました。

・アリヤー ヨー ヤランジャロー。〈阿内 中男↓中男〉
あの人はとてもすることはできないだろう。

ここに見られるように、「ヨー ン」は全域で言う。ただし、
すでに可能動詞「エル」、「ヨル」、「キル」を持っている地域では
さほど優勢でない。これらを言わない大津郡三隅町以北では「ヨ
ー ン」が優勢なばかりでなく、次のような「ヨー ン」も聞い
た。

・ソリヤー ヨー ノム イヤ。〈戎 高男↓高男〉

(酒が飲めるかという問いに答えて) そりゃ飲むことができる

よ。

・ウチノ マガー ジュー ヨー ヨムヨーニ ナッタ デー。
〈豊原 高女↓高女〉

うちの孫は字を読むことができるようになったよ。

もっともこれらは今回(一九八八年調査)、誘導で聞き得たもの
で、一九八〇年の調査では聞き得ていない(梅光 一九八〇)。

『表現法の全国的調査研究』37・38図によれば、「ヨー」が否定の

山口県下、響灘・日本海域の可能表現法 一九州方言との同質性一

述部と呼応した表現の分布域は中部地方以西にかなり広いが、肯定
の述部と呼応したものは、広島・島根・山口三県には見えない。今
回、田万川町や三隅町で聞けた「ヨー ン」は、「ヨー ン」の
基盤の上に、みずから造出したものかもしれない。この地域にかぎ
らないが、可能・不可能表現を仕立てる「ヨー」(得)とは別に、
形容詞から転成した副詞「ヨー」がある。両者は「ヨー ヨム」
(読み得る)、「ヨー ヨム」(上手に読む。たびたび読む)のよ
うに、アクセントも異なるが、まぎれることがある。

ところで、「ヨエル」、「ヨヨル」、「ヨキル」の可能表現をす
でに持つ地では、「ヨー ン」の受け入れ方が微妙かつ多様であ
る。

たとえば長門市では能力可能には「ヨヨル」を言うが、能力不可
能には、「ヨラン」を言わず「ヨー ン」を言う。

・アタクシガ アンター ミギモ ヒダリモ ヨー シマセンカラ
ノ。〈大泊 高女↓調〉

私がねえ、家事は一切できませんからねえ。

また不可能表現にも「ヨエン」、「ヨヨラン」、「ヨキラン」を
言う地域では、新来の「ヨー ン」は、丁寧体の文の中で使われ
ることが多いようである。これは男性よりは女性の方が早く受入れ
ていることも関係があるかもしれない。

「ヨー ン」はまた、心情性の強い表現によく用いられる。

たとえば「オヨギヤ エン」や「オヨギキラン」は、まさにその能
力のないことを言っている。一方、「ヨー オヨガン」は、「あんな
汚い所では泳ぐ気になれない」といった意味合いで言われること

が多い。

「～エン」、「～ヨラン」、「～キラン」の能力不可能形式を持つ地域ではまた、この形式の上にさらに「ヨ」を置くことがある。

・アルイチャー ヨー イキヤル エン イナ。〈阿内 高男↓調〉
私は歩いてはともに行けないよ。

・ヨー クイヨラン。〈見島 高女〉

（都会に出ている子供はほんなおいしい魚を）とともとも食べることではない（かわいそうに）。

・クレチュー コター ヨー イキラン。〈正明市 高女〉

（いい娘さんだが、私の家なんか）嫁にくれなんてとも言えない。

これらの不可能表現文には心情性がきわめて濃いが、その心情性を担っているのは副詞「ヨ」である。ただし「ヨ」が「～レン」、「～ラン」不可能文と呼応することは当該域ではまれなように、筆者の自然傍受法調査では聞き得ていない。したがって「レル」「ラレル」以外の可能助動詞を有しない北半域には、このような状況は見られない。

文献上に見られる、副詞「え」と不可能形式との呼応の例は、院政期以降に多いようである（村山 一九八二）。氏は「そうした破格形式を許す事情を、（筆者中略）『え』の機能の弱まりに帰してみたい」と言われる。「時代別国語大辞典室町時代編一」も、「え」の原義の薄れた結果と説いている。

では当該の南半域で、「ヨ」が不可能表現を修飾して心情訴えに働いている状況はどのように解釈できるであろうか。長門市以南

の南半域と見島には、助動詞を添えて言う不可能表現がすでにあった。そこに、副詞と否定の述部を呼応させるという異質の不可能表現形式が入ってきた時、まずこの異質のものを、従来あるものとはやや異なる働きのもの——心情性の濃い能力不可能表現法——として受容した。さらには、従来の能力不可能表現形式の上に副詞「ヨ」を置いて、これを心情訴え要素とした。副詞は本来的に心情訴えに働きやすい品詞であるからこれは自然な推移である。

三 動詞を用いて言う可能表現

・キョーワ エー ゴフシंगा ナリマシテ オメデトー ゴザイマス。〈江津 新築祝のあいさつ〉

今日は立派な御普請ができておめでとうございます。

・ムカシャー アナタ テレビジャンジャ アリマセンカラ シ

ゴトガ ナッタモンデ アリマス。〈湊 高女↓調〉

昔はねえ、テレビだのなんだのありませんから仕事ができただですよ。

このように、動詞「ナル」を用いて言う可能表現は、事がらを主語にたてて、それが実現したことを言うものである。「ナル」の主語に人物がたつことはない。人の動作・行為の実現を言う時は、「セル」コトガ ナル（することができる）〈都濃郡鹿野町〉、「ワシデモ カク コター ナル」（私でも書くことができる）〈玖珂郡美和町〉のように言う。ただし、長門域では聞かない。これらの「ナル」と、鹿兒島の「キーガナル」（着ることができ）などとはどのようにかわるものであろうか。

「ナラン」は次のように用いられている。

。アツデー ベンキョーニヤー ナラン。〈吉見 中男〉

暑くて勉強ができない（実現しない）。

。シゴトガ ナランカラ。〈見島 高男↓高女〉

仕事ができないから。

。ハー ユダンガ ナラン ネー。〈江津 高女↓調〉

あの、油断ができないねえ。

。カワリヤー ナラン ドナ。〈吉見妙寺 高女〉

替わることはできないよ。

最後の「カワリヤー ナラン」の意味は禁止に近い。「ナル」を言う可能表現は、当域では衰えかけているようで、「古い人が言う」などと説明されることがあった。

「ナル」が事からの実現を言うのに対して、「デキル」は行為そのことを言う。

。ハヤイ コト カエツテ コンニヤー ハナエガ デキンケー。

〈尾浦 高男↓調〉

早く帰って来ないと（明日出かける）準備をすることができないから。

可能を言う動詞には、「行ケル」、「書ケル」のように、五段活用動詞から造出された、いわゆる可能動詞がある。「見レル」、「出レル」、「起キレル」、「来レル」などと、一段活用動詞、カ変動詞からも造出されている。

。オコサンニヤー トレン ワナ。〈吉見下 高男↓調〉

あわびは岩からはがさないと捕ることができないよ。

山口県下、響灘・日本海域の可能表現法 —九州方言との同質性—

。アノ タオノホーワ トーリョーケンド ヨシミダオノホーワ トーレンデシヨ。〈内日 高男↓調〉

あの峠の方は通ることができただろうけれど、吉見峠の方は通られないでしょう。

これらの文の、「トレン」、「トリーヨ」、 「トリーレン」は、いわゆる状況可能である。状況可能のばあい、助動詞「レル」、「ラレル」を添えたものと可能動詞との使い分けは明らかにし得ていない。

。ワタシドモ アネー ヤレンダッタ。〈内日 老男↓調〉

私どもはあんなにはできなかった。

。イマー マダ ノレヨル。〈戎 高男↓調〉

（もう年老いたけれど、今はまだ船に乗ることができています）

。オキレル カネ。〈戎 青男↓調〉

魚のせりに間に合うように起きることができかね。

これらの文中の「ヤレン」、「ノレヨル」、「オキレル」は、いわゆる能力可能である。能力可能のばあい、先に記した特定の能力可能形式と、「レル」「ラレル」を添えた形式と、可能動詞とが併用されているのであるが、可能を言う意向の強いばあいは特定の能力可能形式を用いるようである。

高年者は可能動詞をも、次の文中の「アガルル」のように下二段型で言うことがある。

。ドネーコネー マダ ハタケーモ アガルル。〈高女↓調〉

（この年になつても）どうかこうにかまだ鼠へも上がることをできる。

おわりに

本稿を書き始めた動機は、これまで断片的に報告してきた、当域の「エル」・「ヨル」可能表現法の状況を整理し、考えてみようとしたところにあった。考古学研究者の木下尚子氏は、この地域、ことに浦の埋蔵物は、玄海灘の向うの北九州の地から出る物ときわめて近いと言われる。また瀬戸内海を渡ってきたと思えるものは、内陸域からは多く出るが浦には少ないとも言われる。この状況と方言状況との一致は偶然ではあるまい。当域も北九州の玄海灘域も、ともに国土の周辺域としての共通性を持っているのであろう。玄海灘、響灘上の海上交通も両域を関係深い地域としたのであろう。

当域の南半域は、「得る」可能表現法を持つことにおいて長崎県・佐賀県に近いばかりでなく、この上に「キル」可能表現法を重ねている点でも同質である。ただし、当域はまた、九州では東の宮崎県域にしかない「ヨー・ン」表現法をも有している。背後に九州山脈を負うた長崎・佐賀の地にくらべれば、当域は東からの影響を受けやすい位置にあった。九州から北上してくるものと本土域を西進してくるもの、両者をどのように生活語にとりこんでいくのか、この地域は伝播による、方言の推移と変容の姿を見るにも重要な所である。

ところで当域の北半域は可能表現法においてはかなり単純であり、広島県域、また山口県下の周防域の状況に近い。この北半域の中心地である萩が、かつては藩政の中心地であったという事情にもよるのであろうか。

当域における可能表現法上の南北差は、方言状況全般にわたって言い得るものかどうか、調査を続けたい。そして当域方言状況の語るところが全国方言のありかたにどのような意味を持つかを考え続けたい。

文 献

- 愛宕八郎康隆（一九七八）「肥前長崎地方の「〜キル」「〜ユル」について」（『長崎大学教育学部人文科学研究報告』第27号）
- 大橋勝男（一九八八）「統生きているお国ことば」野島出版
- 岡野信子（一九八三）「海がことばに働くとき」（『梅光女学院大学公開講座論集』第14集、笠間書院）
- 岡野信子（一九八八）「関門海峡圏域の方言状況」（『地域文化研究紀要』第三号、梅光女学院大学地域文化研究所）
- 春日政治（一九三三）「『小学方言講義』より」（『文学研究第四輯』九州文学会）
- 神部宏泰（一九八七）「九州方言の可能表現法」（『兵庫教育大学研究紀要』第7巻（兵庫教育大学））
- 国立国語研究所（一九七九）『表現法の全国的調査研究』
- 渋谷勝己（一九八六）「可能表現の発展・素描」（『日本学報』5）
- 大阪大学文学部日本学研究室
- 土井忠生訳（一九五五）『ロドリゲス日本大文典』三省堂
- 土井忠生・森田武・長南実編訳（一九八〇）『邦訳日葡辞書』岩波書店
- 梅光女学院大学方言研究ゼミナール（一九七六）『山口福岡両県接

【境地域言語地図集】

梅光女学院大学方言研究会（一九八〇）『梅光方言研究』第2号

村山昌俊（一九八一）『副詞「え」考』（『国語研究』四四号、国学院大学）

山口県下、響灘・日本海域の可能表現法——九州方言との同質性——